

帽子屋の百の帽子の秋の暮

藤田湘子

湘子先生はいつもお洒落な帽子を被っていた。中央例会に上京した時、先生の帽子係というお役を仰せつかって驚いたことがある。これがなかなか難しい。二次会、三次会とお酒が進む中、この店はいよいよお開きという丁度のタイミングに、さりげなく、先生に手渡すのだ。

『俳句好日』によれば、先生の書齋には常時十四個位の帽子の函が並んでいたらしい。新しい帽子を買うと使っていたものを、酒席で誰かに進呈したくなる癖へきがあつて、いつも同じくらしいの手持ちであつたという。

帽子屋に整然と並ぶ帽子の、それぞれの表情に、秋の暮の情趣を感じるところに、湘子の詩心を感じる。

「幾つかは遺品とならむ冬帽子」最晩年の切ない句。

1984年 (s59.09.18作) 第七句集『去来の花』鑑賞・野本京